

オフ・ブロードウェイの演劇

石田章



オフ・ブロードウェイの劇場風景

アメリカの演劇の中心がニューヨークにあり、そのニューヨークの商業演劇の拠点がブロードウェイ (Broadway) であることは誰でも知っている。いわゆるタイムズスクエアを中心に、ブロードウェイ (マンハッタンを南北に斜めに走る通りの名) をはさんで、四十二丁目から五十七丁目のあたりにかけて、およそ三十ばかりの劇場が集まっている。これがいわゆるブロードウェイである。

このブロードウェイに対して、オフ・ブロードウェイ (Off-Broadway) というのがある。この「オフ」(Off) という言葉には二つの意味が含まれている。ひとつは、ブロードウェイを離れた区域、という地理的な意味。もうひとつは、ブロードウェイの商業主義的演劇に対して、非商業主義的な、前衛的、実験的な演劇という意味である。

オフ・ブロードウェイの劇場は、マンハッタンのだウンタウン、いわゆるグリニッチ・ヴィレッジ (Greenwich Village) に比較的多く集まっているが、例えば、マーティニク・シアターとかニュー・シアターなどのように、ヴィレッジを遠くはずれた劇場もかなりある。

オフ・ブロードウェイの劇場の数がどれくらいあるのか、正確にはつかめないが、およそ三十くらいはあると思われる。もっとも、オフ・ブロードウェイの意味を拡大解釈して、ブロードウェイ以外の非商業主義的演劇という広義の概念を仮にあてるとすれば、最近アメリカの演劇の大きな要素となりつつある地方都市における、いわゆるコミュニティーシアター (Community Theatre) の演劇や劇場も入りうることになる。が、ここでは、あくまで、ニューヨークのオフ・ブロードウェイに話を限って進めたい。

オフ・ブロードウェイの特色はなにか、と言えば、これはやはりなんといっても、ブロードウェイのそれがプロデューサー・システムによる大劇場での商業主義演劇であるのに対し、「オフ」のそれは、多くは劇団制をと

る小劇場での実験的、前衛的な演劇、ということになる。

ブロードウェイの芝居は「商品」であるから、たとえよい芝居であっても、金にならなければ困るわけだ。だから、自然、ブロードウェイの出し物は、ミュージカルや軽いコメディのような一般受けのするものが中心になる。もちろん、これらのミュージカルやコメディの中にも、演劇として非常にすぐれたものが全く無いというわけではない。ブロードウェイの芝居で、私が観たものの中にも、演劇芸術として一級品と思われるものも幾つかあった。しかし、これらの一級品も、あくまで、コマージュリズムという一つの厳然たるブロードウェイの枠内で成立しているのであって、それを大きくはみ出るような作品は当然興行資本家たちから敬遠される。サミュエル・ベケットだとか、ジャン・ジュネ、ハロルド・ピンターなどといったヨーロッパの前衛的な作家や、或はアメリカの新人劇作家の作品などは、よほどのことがない限りブロードウェイでは観られない。しかし、*「オフ」*では、こういう作家がしばしば大胆にとり上げられるのである。私がベケットの「幸

いなる日々」や「クラップの最後のテープ」、ロビンソン・ジェフアーズの「メディア」、

エドワード・オールビーの「動物園物語」、アン・ジェリコーの「恋のこつ」などの作品を観たのはすべて*「オフ」*の小屋だった。やはりヴィレジにある劇場だが、グリニッチ・ミュージズ・シアターという小屋では、ラシーヌの「フェードル」を本場フランスの演出家の手で見せた。これは、ニューヨークにある IASTA (Institute for Advanced Studies in the Theatre Arts) という組織が、世界各国の演出家や俳優を招いて、各地の古典的な作品を意欲的に上演する試みを続けているが、その一つで、日本からも、先年、歌舞伎の尾上梅幸が「鳴神」を、能の喜多節世が金春流の「一角仙人」を、それぞれ演出上演している。また、別の小屋だが、やはりヴィレジにあるサークル・イン・ザ・スクエアでユージン・オニールの「トロイの女」を観た。これは、かつて映画「エレクトラ」でその異才ぶりを見せたギリシャの演出家マイケル・カコヤニス

の演出によるもので、斬新な感覚でギリシャ悲劇の精髓を見事に現代の舞台に写し出していた。こういう鮮烈な試みは、おそらく

*

*「オフ」*の舞台でなければ出来ないだろう。オフ・ブロードウェイの特色でもうひとつあげられるのはその劇場である。劇場といえは聞えはよいがまず小屋といった方がずっと早い。多くは、ヴィレジの古ぼけたアパートの谷間の倉庫を改造したり、教会の地下室を使って劇場に仕立てたり、ホテルの一部の小ホールを使って上演の場にしたりしている。ニューヨークの劇場は、新設のリンカーン・センターは別だが、大体が、すでにかなり長い歴史を経てきているから、ブロードウェイの檜舞台でも、案外くすんで古ぼけた劇場が多い。が、*「オフ」*の小屋は、それらの劇場と比べても、はるかに小さく見すばらしい。客席数は大体二百前後。比較的大きい小屋でも三百あるかないかだろう。劇場らしいロビーなんかほとんどない。照明のライトなど、天井からむき出しにぶら下がっているのが多い。また、*「オフ」*の劇場には、アリーナ・シアター (Arena Theatre) とかシアター・イン・ザ・ラウンド (Theatre-in-the-Round) と呼ばれる、いわゆる円型劇場が多い。これは劇場の中央に舞台があって、その舞台を三方

或は四方から客席が囲み、いわば、客席の真中で芝居が行われる劇場構造である。古代ギリシャの劇場、エリザベス朝のシェイクスピアの劇場、或は、日本の能舞台などを思い出していただけはいよい。チェリー・レーン・シアターとか、サークル・イン・ザ・スクエアとか、サリヴァン・ストリート・プレイハウスなどはいずれもグリニッチ・ヴィレッジにあるが、みなこの円型劇場である。

この、オフ・ブロードウェイの劇場が小劇場であつて、それもしばしばアリーナ・シアター形式をとつてゐるということは、オフ・ブロードウェイの演劇自体の特質を定める上で大きな意味を含んでゐる。小屋が小さい、ということとは結局観客と舞台との距離が近接してゐるということだ。ここでは、大劇場では不可能な、リアルな細かい演技や演出も可能になるし、また観客はどのような演技や演出を自然なかたちで、受けとめることが出来る。更に、それが円型劇場であれば、舞台は客席自体の中に入りこんでゐるわけであつて、このことは、従来の大劇場のいわゆる額縁舞台形式の劇場でしばしば云々されてきた、舞台と客席との断絶ということ改める足が

りになる。演劇独自の、舞台と観客とが一つに切合う世界を、このような劇場は、客席と舞台とが対面しあつた大劇場よりは、はるかに多く出しようの要素を多分に持つてゐるといえる。例えば、チェリー・レーン・シアターは、舞台を三方から客席が囲むアリーナ・シアターであるが、ここで観たアーサー・ミラーの「橋からの眺め」のすさまじい迫力は作品自体の持つ潜在的な力も勿論あるが、それを直接観客の中に喰ひ込ませる演出、演技を可能にした、この劇場の舞台構造が大いにあづかつて力あつたように思える。

*

△オフの小屋が小さく、見すばらしく、そこでは多く前衛的な作家の作品が上演されてゐる、と書けば、何となく一種の未成熟な青っぽい演劇青年の集団を思わせるだろう。事実、そういう雰囲気劇場やグループもなくはない。が、概して言えば、彼らの演技や演出は、成熟した立派な大人のものだ。斬新な若さに満ちてはいるが、それが決して未熟な青さになつてはいない。すでにすぐれた技術を身につけた一人前の演出家や俳優が、芸術としての演劇の理想を彼らなりに追い求めて

集つてくるのが、オフ・ブロードウェイの舞台なのだと言えるだろう。だが、その芸術が決して乾涸らびたものではなく、みづみづしさと共に、芝居というものが本来持つ楽しさをも併せ持つてゐるところに、私は△オフへの限りない敬愛を覚える。△オフの小屋でも、「ザ・ファンタステックス」や、「マッド・ショウ」のように、歌と踊りの愉快なミュージカルスが観られるし、△オフで好評を博している「恋のこつ」を演出したマイク・ニコルズは、同時に、ブロードウェイの当り狂言「公園を裸足で」の演出者でもある。

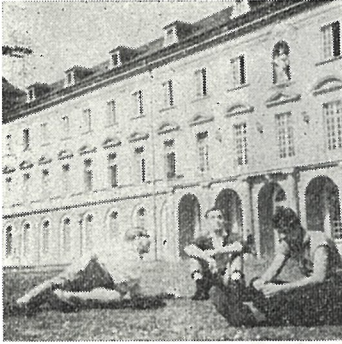
オフ・ブロードウェイは今降り坂だ、という言葉を私は何度か耳にした。たしかに、記録にあらわれた数字の上では、一九六二年頃を頂点に、△オフの活動は下降線を通つてゐる。けれども、△オフの芝居が持つてゐる、この厳しさ、と同時に、しなやかな豊かさが見失ふことはいない限り、△オフはその本質を

私は、オフ・ブロードウェイの持つ、この厳しい自由を愛する。

(女子大助教授・英文学)

夢みる力

青井厚



ボン大学のキャンパス

「夢みる力のなくなつた者は、生きる力もない」
エルンスト・トラア

私は在外研究三ヵ月のおゆるしをえたと
き、その有効適切なスケジュールの作成に迷
つたが、結局、社会学のメツカであるメリ
カを先に、ついで欧州各地の主要大学を歴訪
して社会学の動向と社会学教育の状況を調査
研究することにし、できればこの機会にアマ
ースト・カレッジと、私の長女が一ヵ年在学
したバアデュー大学に立寄ることにした。限
られた紙幅で凡てをつくすことは到底不可
能で、調査研究の発表は別途の機関でおこ
なひ、ここでは足跡を印した大学の印象を記す
るにとどめたい。

*

三月末羽田発、サンフランシスコに一週間
滞在、カリフォルニア大学とスタンフォード
大学を訪問した。カリフォルニア大学はバー
クレーの裏山の麓から申度にかけての傾斜地
を利用した学園で、すでにキャンパスには藤
の花が咲き、桜が満開であった。最近この
社会学部が特に充実してきた。政治社会学の
権威リブセット教授は数年前アメリカセミナ
ーの夏期講座で同志社大学にみえたことがあ

る。ここは本校であるが他の分校とあわせる
とアメリカ第一の大学であろう。スタンフォ
ード大学はサンフランシスコの南方三十哩の
パロ・アルトーの学園都市にあるバーム・ツ
リーでかこまれた広大なキャンパスをもち、
一八八五年スタンフォード氏がひとり息子
をなくされてその記念として創立されたもの
で、政治・宗教に囚われない男女共学であ
る。学園の建物は荘重典雅、特にフウバー
タワーはその象徴であろう。礼拝に出てメモ
リアル・チャーチのステインド・グラスの美
しさに恍惚とした。学生は野性的でニックネ
ームは「Red」という。慶応その他の日本の
大学との交流もある伝統ある大平洋岸の名門
校である。シカゴに十日間滞在、シカゴ大学
は同志社との関係も深く、日本人留学生によ
る国際会館での私の歓迎会の席上で、諸先生
方のおうわさがでて、同志社にかえつたよう
な気安さを感じた。またこの大学はかつてシ
カゴ学派として社会学史上不滅の光を放ち、
パーク教授は今や亡く、パーゼエス教授はフ
ロリダの別荘に自適している。レオ・シュト
ラウス教授のプラトンの対話「The Meno」
を聴講したが感銘した。フットボールのグラ

ウナムの近くで“On December 2, 1942, Man achieved here”と記した原子の火の遺跡があり、複雑なものを感じた。晴れた日、西ラファエットの緑にかこまれた学園都市にあるパデュー大学をおとすれた。生物学の小林教授の御案内でキャンパス内の空港やゴルフ場をあるいた。ここは自然科学系の学園で親子二代、外国の大学に足跡を印したことはうれしかった。

ミシガン大学はデトロイトより三八マイルのアンナーバーにあり、創立は一八一七年と古く、州立大学の母体といわれる。三階の社会学研究室に故クローリー教授の像があり“*What is real to me is the perception and expression of lasting truth about human life*”の言葉が私の心をつつた。長老のエンゼル教授に会い、著書をいただき、いろいろ助言をうけた。教授は故クローリー教授の甥にあたり名門出である。ここでは人口研究所の竹下助教授の御世話で日本研究所、社会調査研究所など視察し、いろいろ便宜を与えてくたさった。

四月二十日アマー・スト・カレッジ訪問、同社出身で政治学を勉強している岡島貞一郎

君の紹介で総長にあった。総長は特に同志社からおくった学位記を感謝しておられた。チャペルの絵にサインして記念品として下さった。翌朝礼拝のとき、カリフォルニア大学から転任の経済学担当の新任教授の紹介があった。その教授は形式を重んずる大きな大学から、人格教育を中心とする小さな大学にきたことを光榮とするといった。同志社からおくられた紫の旗がしずかにゆれて印象的であった。ここでは試験のとき教授は問題を配布してかえるそうだ。それでうまくゆくかときいたら岡島君はここでは約束事でゆくので“*Intellectual honesty*”とすつかに答えた。こうした伝統と環境にあって、新島襄、内村鑑三、神田乃武、クローリッジ、パーソンズも育ったのであろう。

ボストンについた夜、同志社で一ヵ年訪問教授としてつくされたボストン大学の宮川教授、ハーヴァード大学で歴史研究の同志社の浅香教授、それに大学院で宗教社会学を勉強している社会学科出身の志茂君がホテルに集って下さった。翌日日本研究の社会学者ベラ助教授を研究室にたずね、著書や最近の抜刷をいただいた。ボストンではこのほかボスト

ン大学、MITの研究室を訪れた。Harvard Yenching Libraryの応接室に掲げられた軸物の「文明新旧能相益 心理東西本自同」の文言に含蓄ふかいものを感じた。理論社会学界の王座を占めるパーソンズ教授の“*The Academic Profession in Modern Society*”の講演が行なわれた。宮川教授の案内でレキシントン古戦場をみた。

ニューヨークのケネディ空港についたとき、コロンビア大学でビジネス・アドミニストレーションを勉強している社会学科出身の大西邦介君が出迎えてくださった。コロンビア大学はこれまた社会学史上、コロンビア派としてシカゴ学派におとらぬ輝かしい歴史と伝統をもっている。ある日親日家で有名なパッシン教授をおとすれ、彼の相国寺での参禅生活の体験談をきき、同志社の現状をはなし、またアメリカの矛盾と日米関係の今後の展望を語りあった。ニューヨーク大学ではマッキーバー教授の女婿で、社会学史家として有名なRobert Bierstedt教授に御世話になり、著書や最近の抜刷りをいただいた。

ある日グリニッチ・ビレッジに住む日本の学生に会い、最近アメリカの若者の間で流行

しているLSDという覚醒剤の話をきいた。ニューヨークに新しい社会問題が生まれてきたようである。ワシントンではジョージ・ワシントン大学を訪れた。

*

イギリスには二週間滞在、ロンドンでは主としてロンドン大学、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学に通った。ロンドン大学ではギンスバーク教授が退き、日本研究家のドーア教授がいる。「日本近代化論の再検討」を「潮」十月号に書いている。

オックスフォードでは東大を出て日本興業銀行から派遣されてジョンズ・カッレジで経済学を勉強している金沢君にお世話になる。マロニエの花咲き香る寄宿舎、ゆきとどいた人格教育、中世の僧院をおもわせるムードは、現代に生きる者に違和感を与えた。

スコットランドではエジンバラ大学とグラスゴー大学を訪れた。エジンバラ大学の穴倉のような暗い石造りのStudent Refectoryで熱心に討論している学生の真摯な態度に感激した。

*

フランスではバリだけ、バリ滞在中よくラ

テン区にゆく。モンティニューの像の前で下車し、大学を訪れ、午後三時頃までキャンパスや書店をまわり、カフェで休憩し、よく日本の学生や画家に出会った。かえりは徒歩でノートルダム寺院前広場、セーヌ河畔の古本屋を漁りつつルーブル美術館の前に出る。雨降れば樹蔭に憩う。そしてエトワールの凱旋門に出る。シャンゼリゼーのレストランで夕食をとってホテルにかえる。「道に迷うことはパリを味わうことだ」。パリ大学はギュルヴィツチ教授の死去にあい一抹の寂しさを感じしめる。

*

ドイツではハイデルベルク、ボン、フランクフルト・アム・マイン、ケルン、ミュンヘンの各大学を訪れた。ベルリンで弘前大学医学部花田博士に、外国での研究の困難を話したら「ああもしたい、こうもしたいとおもってできず、別れてゆくものが旅情というものだ」としんみり語られ心にしみた。バスで東独を見学、ベルリンでは自由大学を訪れた。ハイデルベルク行は私の少年時代からの夢にえがいた念願で、大学・古城・ネッカ河、それに哲学者の道、みんな詩となり絵とな

る。ここでは広島大学の高田助教授とハイデルベルク大学の助手のパエス君の御世話になった。マックス・ウェーバーの歴史と伝統が身にしみてくる。Student Prison (学生拘禁所)は学生自治権の確保の歴史として興味があった。フランクフルトでは台湾出身の政治史専攻の学生が林要、長谷部文雄、住谷悦治先生の著書にくわしく、アドルフ教授と学生運動について語ってくれた。ボン大学では主任教授がイタリア出張のため、社会学科の学生とカスタニアンの森の樹蔭で語合った。

ケルン大学にはヴィーゼ教授やケーニツヒ教授がおり、ドイツの社会学の名門であり、研究室もゆきとどいていた。ミュンヘン大学にはフランシス教授がおり、森の都オーストリアのウィーン大学は社会学、経済学の方面に特色ありシェンブルン宮の森と池と水蓮の美は忘れられない。

*

イタリアはミラノ、ベニス、フロレンス、ローマ、ナポリを通りその間ローマ大学を訪れた。ムッソリーニ支配下に社会学はおとろえ、あまりふるっていない。あと、アテネ、香港を経て帰国した。(文学部教授・社会学史)